発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2−4−1
丸ノ内ビルデング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者 堀内六郎
印刷所 関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1982年6月25日発行
第14巻 第6号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 14 No. 6号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

スウェーデン社会研究所設立十五周年記念公開講演会開催さる

Our 15th Anniversary Public Lecture Meeting Held

去る5月25日、東京新聞と共催、スウェーデン大使館および日瑞基金の後援のもとに、東京・北の丸公園の科学技術館ホールで、スウェーデン社会研究所設立十五周年記念公開講演会を開催した。

まず、松前当研究所会長、平田同所長および帰国間際にも拘らず出席されたスウェーデン大使館ユベウス報道官より挨拶があり、講演は、明治大学教授岡野加穂留氏の「スウェーデンに見る平和の生きざま――北欧デモクラシーと非核地帯」と、環境・社会政策研究所主宰潮見憲三郎氏の「オンブズマンによる国政査察――主権者としての民衆による監視」で、この講演会のキャッチフレーズ「いま、みつめよう平和と政治」の示すわれわれの終局的な希望である真の平和の追求のため意義深い講話が行われ、聴衆の感銘一入であった。

最後に、スウェーデン大使館提供の映画「アドバンテージ・スウェーデン」が上映されたが、今回の講演会の意義を印象的にしたものと考える。

なお、冒頭の会長および所長の挨拶のなかで、ユベウス報道官の在任中における当研究所に対する厚い援助に対し感謝の言葉が述べられたが、今後の活躍を心から祈念する次第である。

また、当日は、ストックホルム大学国際主幹のJ・エングベルイ氏のご臨席があったが、まことに光栄のことと謝意を表する次第である。

松前会長の挨拶

ユベウス報道官の挨拶

岡野加穂留教授の講演

潮見憲三郎主宰の講演

故アルムクヴィスト元駐日スウェーデン大使を偲んで

Memorial Words for the Late Swedish Ambassador Mr. Almqvist

専修大学法学部教授　菱　木　昭八朗
Prof. Shohachiro Hishiki

最近スウェーデン社会研究所から送られてきた「スウェーデン社会研究月報」第4号で、元駐日スウェーデン大使、アルムクヴィストさんが亡くなられたと云う記事を読んで、なんだかまたこれで私とスウェーデンの関係が遠くなったと云う感じである。

私が始めてアルムクヴィストさんにお目にかかったのは、今から15年も前の1967年の夏頃のことである。1967年から68年にかけてのスウェーデン政府奨学金留学生に選ばれてスウェーデン大使館に挨拶にいったときのことである。

そのとき大使から、私がスウェーデンで勉強しようと思っていたウプサラ学派やスウェーデンでの指導教授のことについて尋ねられたが、そのとき、私の指導教授がストックホルム大学のフォルケ・シユミット教授だと云うこと知って大変びっくりしていたことを今でも思い出す。大使はフォルケ・シユミット教授とウプサラ大学で机を並べて勉強した仲であったからである。その為か話がはづんで、小一時間、大使とウプサラ学派やフォルケ・シユミット教授の思い出を語り合った。

そのときの私の大使の印象は、大変親切な典型的なスウェーデン紳士と云う感じであった。今でも、その時の大使のソフトなスウェーデン語が私の耳にしみついている。

アルムクヴィストさんはまた大変律儀なお人でもあった。私がスウェーデン留学から帰ってきた翌年、日本私立大学連盟から出版されている機関誌、「大学時報」に頼まれて、「果してスウェーデンはフリー・セックスの天国か」という雑文を書いたことがある。丁度、日本でスウェーデンのフリー・セツクスが喧伝されていたころのことである。私がその雑文の抜刷を一部、アルムクヴィストさんにお送りしたところ、大変丁重な礼状を頂いて恐縮した。今でもその手紙は私の信書ファィルの中に残されている。それから、私がスウェーデン法関係の論文を書く度に、アルムクヴィストさんにその抜刷をお送していたが、その度に丁重な礼状が届けられてきていた。

それから何年か後のことである。私がウプサラ大学の客員教授としてスウェーデンに滞在していた頃、一夏、北国の夏を楽しむために北スウェーデンのハンメルダールと云う一寒村で暮したことがある。丁度そのとき私の階下に住んでいて、その部落の小学校の家庭科の先生をしていた御婦人の方から「日本のスウェーデン大使をしていたアルムクヴィストと云う人を知っているか」と尋ねられたことがある。「知っている。」と答えたら、彼女は、「彼は私の小学校のクラスメートの一人だ」と云って、彼女の小学校時代の一枚の古い写真をもってきて「これがアルムクヴィストだ」と教えてくれた。そのとき私は始めてアルムクヴィストさんがダーラナ地方の出身であると云うこと知ったのであるが、そのとき彼女は、アルムクヴィストが大変優秀な生徒であったと、昔のことを思い出して、アルムクヴィストのことを色々と話して聞かせてくれた。しかし、その彼女も、もう、この世の人ではなくなっている。

何時だったか、スウェーデンに滞在中、一度、アルムクヴィストさんにお目にかかったことがあるが、そのとき、その女の先生のことを話したら、「ヤッ、ソー、彼女は今ハンメルダールにいるのか、一度会って見たいね。」と、これまた少年時代の昔を懐しんでおられたことを思い出す。

私も度重なるスウェーデン滞在で、いろいろな人に会っているし、またスウェーデン人の中に多くの友人、知人をもっている。しかし人間とはおもしろいもので、たった一度しか会わなくても終世忘れることの出来ない人がいるかと思いば、何度会っても心に残らい人もいる。人徳と云うものだろうか。私にとってアルムクヴィストさんは前者のカテゴリーに属するスウェーデン人の一人である。今、改めてアルムクヴィストさんの事を思い出す。今またアルムクヴィストさんの死によって日瑞親善のために措しまれる人が一人消えていったと云う思いである。

心からアルムクヴィストさんの御冥福をお祈りしたい。　(1682. 5. 8　記)

<翻　訳>

1981年秋におけるスウェーデンの経済状況

リレモール・タリン

The Economic Situation in Sweden in the Fall of 1981

Lillemor Thalin

他の小工業諸国と同様、スウェーデンは、国際的な経済発展に、大きく依存している。スウェーデンの国民総生産のほぼ30%が、輸出によって生み出されているからである。

スウェーデンは同様に、経済予測を頼りとしている。輸出展望の見積り、価格変動、雇用状況、また生産そのものについて、統計研究所のみならず、大工業諸国の公的・私的な分析による予測が基にされている。(スウェーデンにおける経済情報の、最も重要な国内資料についての簡単な説明が、本稿の終わりにある。)

スウェーデン経済は、1980年の終わりから衰退してきている。1980年の夏から秋にかけて、輸出市場で受注の減少が起こり始め、衰退傾向は明らかになった。この傾向は、正に、1980年5月における大がかりな労働争議に追い打ちをかけるものであった。その争議は、第二次大戦後初めて、まる一週間に亘ってスウェーデンのほとんどすべての工業と商業をまひさせたのである。ストライキとロックアウトの共合が、経済の上に、工業生産と輸出の減少を引き起こし、それは、続く数か月間も、損害を持続させた。全体的な傾向は予想以上に急速に悪化し、よくあるように、スウェーデンはまたたく間に、輸出向け生産物に対する需要の低下という事態に陥った。このような経済への影響は、1980年から81年にかけての冬の間、生産の縮小という形で見られ始め、その衰微は、続く春夏にも続いた。そのため、発展に先行する景気上昇はうまくいかず、いずれの策も、前回の1970年半ばにもあった景気後退のどん底から回復する時をスウェーデン経済に与えるまでには強くなかった。

1981年秋に西欧世界について作られた経済展望は、現在の下降曲線は1981年から82年の冬の後半頃に最底まで下るであろうと指摘した。事実、世界経済は、依然衰退の中にある。しかし、82年の見通しは、ごくわずかな回復のきざしを示している。それは、工業生産、個人消費、商品貿易、また、全体的な経済成長の中にである。スウェーデンの貿易市場における経済活動は、1982年において、年の後半に向けて次第に回復可能のようである。

9月半ばのスウェディッシュ・クローネの切り下げによって、我国の輸出向け産業は、おそらく強化された競争力をもって、期待どおりの需要の増加をみることができるであろう。

スウェーデンは、それほどひどく遅れることなく産業の上昇傾向に乗ることが期待されよう。また、景気循環が進路を変えれば、スウェーデンの私的部門は、1970年代半ばにはそれを押さえつけていたところの重荷をかかえる必要がなくなるであろう。この二年で、賃金コストは、他の多くの比較すべき国よりも高くなっている。しかし、世界の事業活動がもち直してきたこの時期に、スウェーデンの企業も、悪い状態にあまんじている訳にはいかなかった。スウェーデンの輸出額は、1976年及び77年に最底であった。しかし、全世界の輸出額は、同時期に拡大したのである。スウェーデンの輸出額は、クローネが三段階にわたる切り下げをされるまで、(最初は1976年、二度目は1977年)動き始めなかった。輸出額の増加は、従って、企業が衰退の間に蓄積した莫大な在庫品を、政府の援助のもとに見切り売りするまで、起こらなかった。このため、輸出額の増大が生産額に目立った影響を与えるまでには、非常に時間がかかった。

しかし、現在の国際的な上昇傾向からみれば、我々は、1976年から78年にかけての遅滞現象の繰り返しを、あまり恐れる必要はない。1981年春の団体交渉の結果、スウェーデンの相対的な賃金コストレベルは、大体前年と同じに留まった。そして、この二年間有効な労働契約によって、1982年の交渉も、競争力の減退の原因とはならないことになる。

更に、「振り出しに戻る」ことのもうひとつの相異点が、前年を振り返って比較した中に認められる。たとえば、製造会社は、1976年から78年にかけてと同じ規模には、在庫品を貯えていない。よって、輸出市場からの需要のもり上がりは、今や、生産の増大によって、よりすばやく読み取れるようになっている。しかし、経済状況にみられるこの明るい局面は、スウェーデンが長い間かかえてきた問題の解決が間近であるという安堵のため息を我々につかせるほどの力はもっていない。

1975年から77年にかけての厳しい年の間にスウェーデンが失った市場の割りあてからみると、我々の輸出額が世界の輸出額の全体的な増加率に追いついていくだけでは、まだ不十分なのである。コストの急騰があった何年間か、及びその後、世界の貿易と工業生産においてスウェーデンの占める割合は、どちらも20%落ちた。それらの損失を再び取り戻すためには（赤字を、現在に換算した支払い方で埋めることが必要であるが）、我々の競争力は〝不変の〟指示表を凌駕しなくてはならない。

1981年9月半ばの10%のクローネ切り下げの決定は、このような局面でとらえることができよう。

1981年の春から夏にかけて、政治家や労働団体や経済学者達は、次々に、相対的なコストレベルは一層大幅に下っていくであろうと表明し始めた。通貨市場の発展のため、スウェーデンのクローネは事実上、ほとんどの主要なヨーロッパの競争国よりも高いものになっていた。ドル相場の上昇も、最も大きな取り引きをヨーロッパ市場で行っている技術関係会社には、小さな慰めでしかなかった。

コスト問題に関しては、三つの解決策が提案された。雇用者による社会保険料の削減、賃金の下降、クローネ価格の引き下げである。

選択は早々に行われた。一つには、大蔵省はあまりに多くの収入を無駄にしているとみられるからであり、二つには、政治的に考えるだけの価値のないものになるためである。このことから、輸出市場で売られたり国内市場で輸入品と競争したりするスウェーデン製品の価格を下げることへの最短距離として、平貨切り下げがとり上げられた。

平貨切り下げの結果、長い間望んできたように、スウェーデンのコストレベルを競争国より低くすることが達成された。1982年には、14の主要産業国との競争は、1970年代のどの時期よりも良くなっている。

この強化された競争の結果、1982年には、輸出額は確実に伸びていきそうである。輸出高は、二年間の後退後、およそ5%ずつ伸びそうであり、それは、世界の輸出期待額を越えるであろう。そのため、市場占有率の回復は、正に1982年にかかっている訳である。

輸出は、スウェーデン経済の中で唯一の説得力をもった強い部門となるであろう。国内市場の開発は、しかし常に弱いであろう。私的消費は、確実に2～3%ずつ落ちるとみられ、資本投資は減り続けていくであろう。公共支出の増加は、先細りになるであろう。

しかし1982年には、工業生産は、安いクローネの結果として厚さを増していく輸出注文書に合わせて、スピードを増すことができるであろう。これは、労働市場から暗さを減らす方向へ進む条件となろう。多くの観察者によれば、1982年の失業率は、平均3%位に留まり、これは、世界的にみれば低い割合といえる。しかし、スウェーデンの経済政策からすると、最初の達成目標は、長いこと努力してきた完全雇用の達成であり、衰退の数年間にさえ、失業率は3%を割ってきたのである。故にこの問題は、来年度の経済政策論争の中心点となることであろう。

政府の景気循環の上下動の悪影響を軽減しようとした積極的対抗策の能力は、スウェーデンの1970年代における経済傾向によって鋭く制約を受けた。70年代の半ば（最初のオイル・ショック後）の世界的な景気後退に対して、社会民主党政権は、公共資金による大担な政策をとろうとした。スウェーデンは、輸出品に対する外国よりの需要減にもかかわらず、生産と雇用を保つように思われ、また、この有効な方法によって拡まっている弱体化の哲学はまもなく終結をみるように期待された。事実、既に非常に順調である生産をもって、スウェーデンは〝上昇気運〟に乗り、我々を繰り返しから救うかにみえた。

この政策は、それほど政治的な論争を引き起こしはしなかった。そして、それは1976年の政権交代まで続いた。

不幸なことに、この筋書きは予定外の方向へと進んでしまった。国際的な不景気は、短くも皮相的でもなかった。それは、長く根の深いものとな

ったのである。

しかし、このような状況の変化も、雇用についての高い理想や公共部門の継続的な発展を阻害するものではない。1970年代後半には、地方公共団体の予算がきまって、年約5％増すことになった。同時に、インフレーションが国家予算の支出を自動的にスライドさせることとなったが、中央政府は依然として弱体な所得者であり、それは主に、経済の低成長が税収入を下げ続けていたためである。

これらの不幸な傾向は、国家予算の均衡を確実に悪化させてきた。1976年に、赤字はGNPの3ないし4％に上昇した。1981年には、赤字はGNPの12ないし13％に昇るであろう。

政府予算の赤字は、経済状況を長い間暗くしてきた根の深い問題のひとつである。赤字の続いた年にはいつでも、国債の利子という重荷が、支出の非常に重い項目となっている。収入より支出の方が多いという状況が、次第に、インフレを引き起こす圧力となっていくのである。そして問題は、赤字が本来解消されるべき主要な市場にまで起こってくるのである。

予算の赤字が（それは、国民経済における消費過多の表われである）、外国への支払いを助長している。〝消費過多〟のうちのあるものは、増加した製品やサービスの輸入へと流れていくことになる。スウェーデンは、外国からの借り入れによって、その大きな外的赤字を埋めているが、それはこの四年間にだんだん一般的になってきた方法である。実を言えば、スウェーデンの正味の海外負債はGNPのせいぜい$\frac{1}{10}$ほどであり、他の北欧諸国よりずっと少ない。しかし、新たな負債が（少なくとも最近まででは）驚くほど速いスピードで生じてきている。加えて、借入れ金のうちのあまりに大きな割合が、投資ではなく消費に費されてきている。

輸出産業の復興と支出の均衡、加えて国家財政の浄化は、今や、与党の非社会主義政党においても野党の社会民主党においても、上位にランクされている課題である。支出の均衡という大問題のことを考えると、スウェーデンが再び工業国に戻っていくようにミクロ経済を方向づけることは、1980年代後半まで無理であろう。しかし、これらすべての悪条件にもかかわらず、スウェーデンを方向転換させるために市民が犠牲となることは避け得よう。スウェーデンは、依然として高い生活水準を保っている（世界で最も高い国のひとつである）。今後の経済成長が、輸出における投資に左右されるのであれば、私的消費の増加は、何年にもわたってほぼ0におさえることが必要となろう。このような発展は、おそらく、政治的にも経済的にも不可能ではないであろう。

スウェーデンの経済情報源

スウェーデンにおいては、経済発展の長期分析を含んだ資料として、少なくとも年2回、公式なものが出される。1月の、政府による議会への国家予算の提出と、4・5月の、この予算の改訂案である。

政府は、基となるデータをKI（全国経済調査機構）から得る。KIは、国際及び国内の経済発展に関する統計を継続的に追っている。加えてKIは、“Konjunkturläget”（〝経済情況〟）という刊行物ので、独自の予算をたてる。そして、年4回、経済界に対する考えについての投票を行うが、それは、収入の状態、注文量、生産計画、株や在庫などの指標に基づいて表わされる。

経済的な出来事の実際の経過を表わすために必要な統計資料は、SCB（スウェーデン中央統計局）によって用意される。毎月SCBは、物価動向、貿易収支、工業生産、雇用等に関しての刊行物を出している。

財政及び貨幣政策の展開は、Riksbanken（スウェーデンの中央銀行）によって、年鑑と四半期ごとの報告の中に記される。これらの公的刊行物以外でも、経済観測は、大手の商業銀行や労働市場における調査機関、またスウェーデン産業連合などで、定期的になされている。

それらの資料は、もちろんスウェーデン語で書かれている。しかし、そのうちのいくつかは、英語に翻訳されるか英語の要約をつけている。しかし、英語で書かれたスウェーデン経済についての最も重要な情報源は、OECDによって毎年出される経済分析である。

（‘Current Sweden’ No. 279 Jan. 1982 より
斎藤伸子訳）

教育・文化研究会

去る4月24日（土）、当研究所会員の中村明雄氏の「スウェーデンの学習社会の成立」と題する講話を中心に学習の権利に関する研究討論会が開催された。

同氏の講話では、スウェーデンではすべての国民に学習の権利が保障され、老人に至るまで学習の場が与えられ、開かれた大学、リカレント教育の確立、教育休暇の導入など所謂学習社会が成立しており、生涯教育の必要が叫ばれているわが国として大きな関心がもたれるが、そのスウェーデンとしても学生の質の低下など幾多の問題をかかえていることが指摘された。

政治・外交研究会

去る5月11日（火）「スウェーデンの社民党の歴史」と題する前スウェーデン駐在日本大使館参事官松下正三先生の講話を中心に、政治問題の研究会が開催された。

松下先生は、その講話で、西欧の社会がイデオロギーで支えられている点をスウーデンを例にとり、1976年の共同決定法などに即して、自由、平等、博愛の精神にもとずいた同国の政治の動きの歴史について述べられた。

ご参加のお誘い

福祉社会の流通・生協視察調査団

昭和57年9月10日～9月24日（15日間）

すでに完全な成熟段階に達し、高度の福祉社会であるとともに、消費者本位の社会を実現しているヨーロッパ諸国の実情は、われわれにとって参考になるところが多々あると思います。特に北欧を中心とする自由な経済社会において、生活協同組合と民間企業との流通分野での公正な競争と共存の関係を実地に視察することは、極めて多くの示唆の得られるものと信じます。

当研究所は、全国農業協同組合連合会の協力を得て、この面の専門学者の指導のもとに第7回目の催しとして標記視察団の派遣を企画しました。

視察先は、概略下表の通りでありますが、ご関心の方々のご連絡をお待ちしております。

スウェーデン社会研究所

視察先一覧（予定）

国名	視察先	国名	視察先
スウェーデン	1. K F 2. テストキッチン 3. 図書館 4. 配送センター 5. 協同組合大学	フランス	1. ランジス市場（中央卸売市場） 2. ソジマ（食品会社） 3. 店舗視察
西ドイツ	1. 消費協同組合卸売連合会 2. 生協店舗	イギリス	1. イギリス消費協同組合本部 2. CWS（卸売協同組合） 3. ロッチデール記念館（生協運動の発祥地）
オランダ	フロリアード '82　花の万国博		